石堂清倫
Ishido Kiyotomo

中野重治と社会主義

中野の生涯はこの秘教化された「マルクス・レーニン主義」が、結局は洞窟のイドラの一つにすぎないことの承認に帰着する性質のものであっただろう。

勁草書房

中野重治と社会主義

石堂清倫

勁草書房

著者紹介

1904年　石川県に生れる
1927年　東京大学文学部卒
著　書　『現代変革の理論』
『わが異端の昭和史』（正・続）
『異端の視点』
『中野重治との日々』
訳　書　『マルクス・エンゲルス全集』
『レーニン全集』
ユ・ア・クラシン『レーニンと現代革命』
『問題別グラムシ著作集』
ロイ・メドヴェーデフ『共産主義とは何か』
アルド・アゴスティ『コミンテルン史』

中野重治と社会主義

1991年11月5日　第1版第1刷発行

著　者　石堂清倫（いしどう きよとも）

発行者　八田恒平

発行所　株式会社　勁草書房（けいそう）

112 東京都文京区後楽 2-23-15　振替／東京 5-175253
電話（編集）03-3815-5277　（営業）03-3814-6861
FAX 03-3814-6854

＊落丁・乱丁本はお取替いたします。　根田印刷／和田製本
＊定価はカバーに表示してあります。　Printed in Japan

＊無断の本書の全部又は一部の複写・複製を禁じます。

ISBN4-326-15262-1

目

次

中野重治と社会主義の運命 …… 1
知識人群像 …… 15
—「むらぎも」の周辺
抒情と反逆 …… 70
—「雨の降る品川駅」
大知識人の境域 …… 91
—「鷗外 その側面」について
「転向」の真実 …… 115
日常性のなかの共産主義 …… 158
—「甲乙丙丁」の歴史的背景
中野重治の政治と神山茂夫 …… 178
—林淑美さんに答える
非文学的な思い出 …… 192
—中野研究会の友人たちのために

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

〔附〕シェリーの社会主義……235
マルクスの娘のシェリー論について……236

第一部

Ⅰ　シェリー自身の人柄　251　Ⅱ　彼にもっとも直接に影響をあたえた人々　262　Ⅲ　抽象的に見た暴政と自由　268　Ⅳ　具体的な暴政　271　Ⅴ　彼の階級闘争観　274　Ⅵ　彼の理解する用語の真の意味　280

第二部

Ⅶ　シェリーの実際的方策　290　Ⅷ　社会の変革は不可避であり、比較的に近い時期に迫っている　302　Ⅸ　シェリーの社会主義的確信が述べられている最重要著作　312　Ⅹ　シェリーの未来像　321

あとがき

中野重治と社会主義の運命

一

中野の会もことしで第十一回、十年をふり返ると世界の変化におどろかされる。ことにこの一、二年は社会主義の世界に、われわれの誰一人として予期しなかったような劇変が生じた。多くの友人たちから、中野がもし生きていたら、どう対処したであろうかという声が折にふれて聞えてくる。

生涯を社会主義と結びつけた中野も、もちろんこれほどの急転換は予期しなかったであろう。おどろきもしたであろうし、悩みもしたであろう。しかし多分絶望することはなく、われわれとともに考えるであろうと思われる。それには、私の考えでは多少根拠がある。そのことを気がついたまま記しておきたい。

社会主義世界に生じた変化は、何よりもその現実の崩壊である。それは何らの論証を必要としない事実なのである。

これまで社会主義運動の一つの拠点であったソ連では、先年ゴルバチョフが、ソ連国民の生活が危機にあることを述べた。そしてその生活を根本から建て直さなければならないと主張した。そのためには社会生活の全面にわたる刷新と、そのための新らしい考え方が必要であることを強調した。彼はそのことを一時的な手直しとしてでなく、十月革命にまさるとも劣らぬ革命、流血の惨事を伴わない根本的変革になるべきだと宣言している。人びとはどう理解したかわからないが、「社会主義」について考えなおすことになるとさえ言っている。

ゴルバチョフは「社会主義」の実体をわれわれよりは直接に深刻に認識していて、相当の荒療治をさえ考えていたにちがいない。ところがいざ言論の自由が許されてみると、彼の予想を大きく越えた変化が相ついでおこった。まさにパンドラの匣をあけたようなものである。ソ連のある理論家は、民主主義化が進行すれば、人民の手による改革が成功すると信じ、たとえば民主化のもっとも進んでいるリトアニアでは、その成果が期待されると昨年末に書いていた。その本が日本に輸入されたのは今年の一月であるが、このときリトアニアはソ連邦からの脱退を宣言した。理論家の先見はこの程度のものであった。彼はまたペレストロイカが労働者階級の手によって実行されることがこの改革の鍵であると述べているが、その労働者たちは炭鉱労働者のように全国的なストライキをやらなければならぬ状態で、まだペレストロイカの段階ではない。十月革命から七三年もたって、共産党指導下のソ連社会は必要な物資とサーヴィスに事を欠いている。社会主義が約束したメリットはきわめて不十分であった。この分では、ソ連が自由な選挙を実行したら、共産党は少数党に顛落しそうである。いや、党自身が思想的にも組織的にも分解しつつあるのが現状であろう。ソ連には二千万人に近い官僚層が

あって、それが国内改革を阻止していると言われている。その大半は共産党員であろう。そうすれば党の一部分が、改革を唱える他の部分の足をひっぱっていることになる。党のかなりの部分がペレストロイカを骨抜きにしようと努力している。こんなことになろうとは、日本の共産主義者は予想もしなかったであろう。

ゴルバチョフは、新らしい思考の重要な一部分として、これまでの社会主義国と資本主義国の対決から相互依存の立場に移ることを説いている。これはレーニンの平和共存論や四〇年近く前のフルシチョフの平和共存論ともちがっている。ゴルバチョフはヨーロッパの共同の家と言っている。さしあたってはヨーロッパであるが、将来はアジアにもアメリカにもアフリカにも、つまり全世界共同の家ということになろう。体制を異にする諸国民が共同で生活するということは、マルクスやレーニンからいえば一つの空想にすぎなかった。それが現実的に可能と考えられだした。つまり、世界の構造が一変したのである。相互依存、協調が新らしい世界史のなかで現実的になったということは、個々の資本主義国のこれまでの階級闘争路線にも当然大きな変化をもたらすであろう。

そのなかで社会主義概念も当然変ってくる。このごろよく言われることであるが、マルクスの「共産党宣言」に述べられた思想のかなりの部分はもう一つの歴史的古典になってしまい、現代でもなお有効なものをそのなかから探しだすとすれば、「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件になる」共同体というくらいになるのであろう。

このような結論を、生きていたら中野が持ちだすだろうとは思われない。中野はしかしこうした結論をなるほどと思うにちがいない。そして、そこから新らしい前進の道を人びとともに探求するこ

とだろうと思われる。

二

戦後の世界社会主義運動における転換は昨日今日にはじまることではない。それはすでに戦後間もないころにはじまっている。これまでの社会主義革命論が帝国主義との決定的対決に外ならなかったのにたいして新らしい道の模索がはじまった。平和と民主主義の新らしい意味、すなわち平和や民主主義が歴史の動因となりうる新らしい情勢が生れてきた。しかしそれはスターリンが死ぬまでは問題にできなかった。スターリン死後、いわゆるスターリン主義批判の形で、指導的イデオロギーとしてのマルクス・レーニン主義が再検討されだした。その一つが、世界的規模での平和共存の可能性ということであり、その第一の系としての資本主義国の社会運動における平和的つまり非暴力で国民的な社会主義への道の可能性ということであった。このことは核兵器の出現による伝統的な戦略の根本的見直しを伴なった。戦争は別の手段による政治の継続であるというクラウゼヴィッツのテーゼにもとづく政治方針をとることはできなくなった。世界的核戦争を有効に阻止しつつ、それぞれの国内で社会主義への道を切りひらくとなれば、その文化的・経済的生産力の主たる担い手である勤労者の努力によって、生活の質と水準を、資本主義下のそれよりも高いものにすることが、階級闘争説の重要な内容になってくるはずであった。社会主義国にも資本主義国にも、新らしいフルシチョフ説にたいする賛否が半ばした。フルシチョフ理論は、いわばスターリン主義内におけるスターリン主義の手直し

の一面があって、なお不徹底であり一面的でもあったが、新らしい道を拓くうえでは重要な役割をはたした。

軍事的側面をも含めてアメリカ帝国主義の打倒なしには世界革命は不可能であるという立場をとる中国共産党は、ソ連共産党の新方針をマルクス・レーニン主義に背叛する現代修正主義と断定し、中国を一方の核として世界共産主義運動を分裂させた。日本共産党は中国の立場を支持した。そのうちにフルシチョフは、改革の癌である官僚制を弱めようとしたため失脚し、ソ連ではネオ・スターリニズムが支配的になった。しかし国際政策は不変であったから、中ソ対立はながくつづいた。

中野はこのなかで、各国共産党の一致した方針である「モスクワ宣言」(十二カ国共産党)と六十四カ国共産党労働者党の「声明」をつよく支持した。しかし日本共産党は実質的にこの「宣言」と「声明」を棚あげにして、中国共産党よりの政策をとるようになった。しかも民主的手続による合意を形成する道によらず、中央部の強引な、非民主的な手法により中国路線の採用を実現した。中野にはこのことは国際統一戦線の破壊、党内官僚主義の強化と映じた。モスクワ宣言の支持をつづけることは、なんら党規律に抵触しないのに、彼はいつしか党内反対派と見られるようになった。

中ソの対立は、結果として世界的な社会主義運動をいちじるしく弱めた。国際的に運動が分裂しただけでなく、各国の労働運動内にも分岐が生じた。中ソ両共産党間の論争は、その具体的進行からみて、いろいろマイナスの結果を生んだことを、中野は憂えた一人である。世界の構造変化にたいする基本的認識に大きな差が生じた以上、完全な一致は望みえないとしても、意見の対立は対立として、現実の行動はなるべく一致するような配慮は、対立者の双方に欠けていたとしか考えられない。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

日本共産党は、中国共産党を支持する点で資本主義国の党としては例外であった。第一次の分裂は一九六一年に生じた。党幹部の一人である春日庄次郎の離党とその後における社会主義革新運動の成立がそれである。このとき中野はどんな立場をとったかが問題である。社会主義革新運動の有力幹部の一人である内藤知周が、あるとき私にむかって、かねて同意を表明していた中野に、一日も早く行動をともにするようにうながしてほしいと言うのである。内藤グループが直接に中野に申入れることがどうしてできなかったのか不明であるが、双方の理解に完全な一致がなかったにしても、同一行動について何かの程度同意があったのでないかと想像される。後年になって中野は、あのとき内藤には気の毒なことをしたと言ったことがある。内藤が春日らとともにいよいよ離党することになり、中野を訪問して決意をうながしたのにたいし、中野は、行動に出る前に、いま一度宮本顕治と話しあうことを勧め、そのためたまたま箱根滞在中の宮本あてに内藤と話しあうことを求める手紙を渡したというのである。内藤は箱根には行かなかった。このことがながく中野の念頭を去らなかったのであろう。当事者がすべて故人となり、いまさら確かめようがないが、あとからの推測として、このときの中野の立場は、宮本よりは内藤に近かったことになる。宮本は中野に異心を感じたことが想像される。共産党第八回大会で中野は中央委員に再選されるが、それは決議権をもたない中央委員としてであり、党内では明らかに格下げされたことになる。

中国共産党が、ソ連の党のように、アメリカその他先進資本主義国との生産力発展の競争を通じて、社会主義の優位を実証できるような地位に到達するには、歴史上長期を必要とすることが当然に予想される。フルシチョフがアメリカと同じ水準に到達するには、あと二〇年か三〇年はかかると計算し

たのは楽観に過ぎ、現実はこの楽観をくつがえしたが、中国は五〇年も六〇年もかかるであろうし、急進的な希望を裏切らないためには、ソ連とちがった経路を選択しないことには、正否をはなれても一応の根拠はあった。

しかし高度資本主義に近い日本が、なぜ中国の急進主義を支持しなければならないか、ここに中野の最初の疑問があった。日本がアメリカ帝国主義のために占領され――のちには半占領と改められるが――そのことによって一切の社会的発展が停止されていることを前提として、社会主義に進むにはまずアメリカの支配からの脱却、つまり民族的独立を達成する民主主義革命の段階を経由しなければならないというのが日本の党の判断である。アメリカの対日支配については、その濃淡についていろいろ解釈上の差異はあるが、第一次分裂時代の党内反対派は、民主的国論の形成を通じて、非暴力的に独立を実現しうると考えたのにたいして、それこそ修正主義であり、改良主義であり、日和見主義であると痛罵されたのである。その背後には、口にはださないまでも対米民族独立が外交交渉などによって実現できるわけがなく、相当の軍事的衝突をまぬかれないという考えがあったのでないかと想像される。すくなくとも中国共産党はアメリカ帝国主義との決戦を構想していたのであって、日本共産党もその考えに追随していたであろう。そのことは、のちに日中の党の関係が悪化したときの中国の対日批判から十分に想像される。ただし、当時の日本で将来の軍事行動の準備がなされていたとは見えないことは事実である。

一九六三年四月一七日に予定された日本の労働組合のゼネストが共産党によって批判され、その結果ストライキ計画は挫折してしまった。このとき、われわれが知った限りでは、区々たる経済闘争に

よって、当局の弾圧を誘い、場合によって党が合法的存在を失うようなことがあっては、必ず通過しなければならない民族独立の大闘争を困難にするという判断が当時の党にあったのである。党はこのゼネスト反対によって総評の支持を失ない労働運動内で孤立した。そんなことでどうして独立の大業に進むことができるのか、新しい疑問を生んだのである。労働運動からの反撃にあって、共産党はこの干渉を自己批判したが、二、三の幹部の降職によっては事態の解決をはかることはできず、自己批判と称するものはまったく不十分であった。中野は七月の中央委員会の会議でそれについて意見をのべ、中央部との対立を決定的にした。これは中野にとって大きな決意を必要としたのである。

彼が決意を固めた時点はいつであったか。一九六一年には、なお党内にとどまって事態を改める希望はあったであろう。第一次分裂とこれにたいする党中央部の態度はこの希望を打ちくだいたであろう。

一九六三年一月七日の日記には

「要するに出直しなり。いろはから出直さん。おそすぎるが外に手なし」

という記述がある。これも決意の一つの現われと見ることができる。八月の中央委員会総会では、中野と形影相弔う形で行動してきた神山茂夫の党員権停止処分にたいする反対を明らかにし、ついに党から逐われることになる。

「甲乙丙丁」の主部はこの二つの中央委員会である。この著作は中野の党生活のすべてを除名後に書いたものである。具体性における中野の党がここに描かれたと言ってよい。

そのなかで、たぶん六二年か六三年のことであるらしいが、彼が本部員からその態度について注意

をうけた話がある。彼は戦前は宮本や蔵原とはいわば朋輩であったかもしれないが、今は事情が変っている、なれなれしい態度、無遠慮な言動をつつしんだ方がいいという意味の忠告を本部勤務員からされるのである。中野は煙たい存在から厄介者に変りつつあった。それにもかかわらず彼が中央部内で何やかや発言するのを、宮本らはますます苦々しく感じるようになったと見える。中野は傲慢だと判断されるようになったのをどの程度自覚していたか。

本年八月に「赤旗」は宮本の論文「歴史にそむく潮流に未来はない」の第七項で、中野を批判している。中野は

「戦後の再入党のときに、『私のようなものでも党に入れるだろうか』と私に聞いたことを、いまでも鮮明におぼえている。その調子は謙虚だった。転向後の彼の苦難を感じさせるものがあった……戦後そういう人々をいたずらに責めるのでなく、その痛切な自己批判を認めて再入党の道をひらき、またその能力に応じて活動家として働けるようにした」(一九九〇・八・二八)。

裁かれる人は謙虚でなければならないが裁く人は謙虚でなくてもいいのか。綱領と規約を承認して入党したものは一律平等である。書記長も平党員も平等であるだけでなく同権でもある。たとえその能力が平等でなくとも、指導と被指導は一つの分業であり、したがって党内では平等に発言できるはずである。そのように考えて、かつて転向者であったことの反省を忘れる中野は傲慢であり、身の程をわきまえないものとされた。

これまで、とくにスターリン時代に、共産党員は特別な質の人間だという信念がつよく、党員と非党員を差別する傾向があった。そしてその差別観は、党内にも反映し、おなじ党員のあいだでも、経

歴や能力やその他の点で、一種のヒエラーキーが存在した。それは、戦後に、「転向」の問題と絡んで制度的なものになっているのである。

中野は中央委員会内での発言で、中央部を支持する多数の中央委員から総攻撃をうけた。それは批判をこえた罵倒であり、一種の魔女狩りに似ていた。

党とは中野にとり何であったか。彼は戦前入党するとき、綱領の説明をきいていない。二七年テーゼというものがあったが、あれは党の上部機関であるコミンテルンが作成したものであって、拘束性をもっている。しかしこれが党員にとって義務的となるためには、党生活のなかで正規に討論され、必要があれば訂正されなければならない。これが雑誌『マルクス主義』に発表されたのは一九二八年の三月号である。三・一五事件の被告人でこれを読まないうちに検挙されたものが多い。党はまだ大会をひらいていないから、大会で正式に決定される機会はなかった。大会がないくらいであるから、中央委員会も民主的に選挙されたことは一度もない。いつも互選であった。規約がはたしてあったか疑問である。三・一五と四・一六の統一公判で中央部は規約の説明をしたが、被告人である私は規約のことを耳にしたのはこれが最初で、それがコミンテルンの一種の模範定款のようなものなのか、そうでなければ、いつどこで決定されたのか、今日までしらべてもわからない。

それだけでない、中央委員が誰であるのかもわからない。非合法の党組織がその氏名を公表するわけはないのだから、指導者は原則としてわからない。しかし、そのことを離れて、ながい党活動のなかで、その人物、その識見、その能力から、誰の目にもふさわしいと思われる指導者が、党員大衆から押されて任務につくといった本来の正常な関係はまだ存在していなかった。あとで、検挙があって

から、こんな人物が指導者であったのかと落胆させられるのがいつものことであった。

しかし現実には、綱領も規約も、指導者の顔ぶれも一つとして知らないわれわれでも、党という一語は無上の権威であった。その党のためとあればどんな犠牲も人びとが甘受したのが実情である。しかじか、かくかくのものとして党に信従したというよりは、一つの抽象的な理想として人びとは「党」を大切にした。それは愚ろかなことでも軽率なことでもなかったのである。党の名において人びとは人間解放の大業についたのである。初期の革命運動の実情として、われわれはそれをあざけることはできない。この信念と信念への献身的熱情は、われわれの多くが、われわれの周辺の多くが、一途に解放を信じたからであるが、その大きな信頼に党が値したか、あるいは値しうるように党機関が反省し努力したことがあったか。残念ながらそのような歴史はなかったようである。ただ内容のない、いわば形式的な権威主義だけが一人歩きしたのでないか。

一九七六年六月二八日に、有志のものが中野と対談したことがある。そのとき中野は、戦前の党の政策、とくにその文芸政策がまちがっていると感じていたことを告白している。それでも彼はその党を立てることを考えたという。立てなければならない党とはここに言った理想としての党である。具体的な世界の党とその運動が誤り、はては亡びることがあっても理想は消えないであろう。党がなんであろうとも、この理想はそれにふさわしい方法で実現されなければならない。

三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com